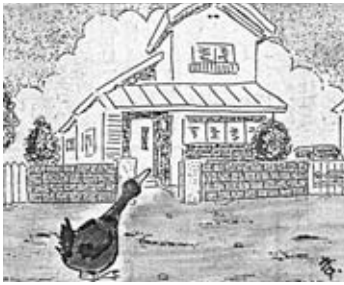


しょうがつ ちんきく
正月の珍客

みんなの童話



「おうい、変なカモが来てるぞ！」

玄関で父さんの声。こたつにもぐりこんでいた圭太（ケータ）はあわててとび出した。

「大池のカモじゃないか？」

「そうだよ、大池のクータだ」

「クータ……？」

圭太はクータを見つめたまま声が出なかった。

圭太とクータの出会いは一カ月前にさかのぼる。

学校の帰り大池のほとりを通った。木々の紅葉もすっかり色あせたというのに、あちこちで大人たちがつり糸をたれ、水辺の近くでは

4、5羽の水鳥が泳いでいた。

おや……？ 中に一羽、見かけないまっ黒なカモがいた。泳ぐでもなく、ただ頭を上げてじーっと圭太を見ている。

なんだあ、おれに用事でもあるのか……と圭太はにらみ返したが、それにしてもいつ、どこからやって来たのかと首をかしげた。

大池は、圭太の家から100メートルほど西にある池で、カモやアヒルが20羽ほど住みついているが、こんな黒いカモは今まで見たこともなかった。北の国からやって来たはぐれ鳥かな、そう思った。

「ふうんそうか、初対面だであいさつしてるのか。それじゃ返礼だ」カパンに給食の残パンがあった、半分ちぎって投げてやった。

ところが横にいたカモがすばやくうばい取って水にもぐった。

「おい、しっかりとれよ！」
「おーい、圭太は残りの半

分を投げてやった。

ところがだめだ。くわえたパンまで取られてしまった。

「アッホー、うばい返せえ！」

でもとびかかっていく元気も勇氣もなさそうだ。見ていて腹が立った。

「あれはいじめだな」

つりをしていたじいさんが言った。

「いじめ……？ なぜ、どうしていじめるなあ」

「よそ者の、黒い鳥だから」

圭太の胸に、じいさんの言葉がグサツとささった。

よそ者だからいじめられる、黒い鳥だから仲間はずれにされる……。そんなことってあるかよ！ 圭太は何かやりきれない気持ちになった。

夕日が照り始めた池に、仲間からはなれた黒いカモが、一羽だけぼつんと、同じ場所と同じくこつで浮いていた。

次の日から、圭太は毎日のように大池に行った。黒カモが気になったからだ。
一週間ほど過ぎたころから黒カ

モは池から上がり、えさをやる圭太のそばに近づくようになったが、ほかのカモたちといっしょに泳いでいるすがたは見られなかった。

十日、二十日過ぎてても、黒カモは仲間を離れてひとりぼっちだった。「よし、今日からおれの仲間だ。おれがケータだでおまえはクータだ」と、名前をつけた。

「いいが、もうすぐ正月だ。遊びに来い、ごちそうしてやるぞ」
そう言って別れたのは、冬休みに入って三日ほどたった日だった。

まさかクータが正月早々来るなどとは、圭太は夢にも思わなかった。言ったことは確かだが、言葉も家も知るはずもないカモがやって来た。

よほど友達がほしかったんだな、それにしても……。庭石の前にはたずんでいる黒カモが、圭太にはかけがえのない友達に思えた。

「クータ！」
げんかんを飛び出すと、クータをだき上げた。

童話作法講座 しろやまの会
講師 寺澤正美